

# お勢登場

江戸川乱歩

青空文庫



肺病やみの格太郎は、今日も又細君においてけぼりを食って、ぼんやりと留守を守つていなければならなかつた。最初の程は、如何なお人好しの彼も、激憤を感じ、それを種に離別を目論んだことさえあつただけけれど、病という弱味が段々彼をあきらめつぽくして了つた。先の短い自分の事、可愛い子供のことなど考えると、乱暴な真似はできなかつた。その点では、第三者である丈、弟の格二郎などの方がテキパキした考を持つていた。彼は兄の弱気を齒痒がつて、時々意見めいた口を利くこともあつた。

「なぜ兄さんは左様なんでらう。僕だつたらとつくに離縁にしてるんだがな。あんな人に憐みをかける所があるんでらうか」

だが、格太郎にとつては、単に憐みという様なことばかりではなかつた。成程、今おせいを離別すれば、文なしの書生つぽに相違ない彼女の相手と共に、たちまち其日にも困る身の上になることは知れていたけれど、その憐みもさることながら、彼にはもつと外（ほか）の理由があつたのだ。子供の行末も無論案じられたし、それに、恥しくて弟などには打（うち）開（あ）け

られもしないけれど、彼には、そんなにされても、まだおせいをあきらめ兼ねる所があった。それ故、彼女が彼から離れ切つて了うのを恐れて、彼女の不倫を責めることさえ遠慮している程なのであつた。

おせいの方では、この格太郎の心持を、知り過ぎる程知つていた。大げさに云えば、そこには暗黙の妥協に似たものが成り立っていた。彼女は隠し男との遊戯の暇には、その余力を以て格太郎を愛撫することを忘れないのだった。格太郎に見れば、この彼女の僅ばかりのおなさけに、不甲斐なくも満足している外はない心持だった。

「でも、子供のことを考えるとね。そう一概なことも出来ないよ。この先一年もつか二年もつか知れないが、俺の寿命は極つているのだし、そこへ持つて来て母親までなくしては、あんまり子供が可哀相だからね。まあもうちつと我慢して見るつもりだ。なあに、その内にはおせいだつて、きつと考え直す時が来るだろうよ」

格太郎はそう答えて、一層弟を齒痒がらせるのを常とした。

だが、格太郎の仏心に引かえて、おせいは考え直すどころか、一日一日と、不倫の恋に溺れて行つた。それには、窮迫して、長病いで寝た切りの、彼女の父親がだしに使われた。彼女は父親を見舞いに行くのだと称しては、三日にあげず家を外にした。果して彼

女が里へ帰っているかどうかを検べるのは、無論訳のないことだったけれど、格太郎はそれすらしなかった。妙な心持である。彼は自分自身に対してさえ、おせいを庇う様な態度を取った。

今日もおせいは、朝から念入りの身じまいをして、いそいそと出掛けて行つた。

「里へ帰るのに、お化粧はいらぬじゃないか」

そんないやみが、口まで出かかるのを、格太郎はじつと堪えていた。此頃では、そうして云い度いことも云わないでいる、自分自身のいじらしさに、一種の快感をさえ覚える様になつていた。

細君が出て行つて了うと、彼は所在なさに趣味を持ち出した盆栽いじりを始めるのだつた。跣足で庭へ下りて、土にまみれていると、それでもいくらか心持が楽になつた。又一つには、そうして趣味に夢中になつてゐる様を装うことが、他人に対しても自分に対しても、必要なのであつた。

おひる時分になると、女中が御飯を知らせに来た。

「あのおひるの用意が出来ましたのですが、もうちつと後になさいますか」

女中さえ、遠慮勝ちにいたいたし相な目で自分を見るのが、格太郎はつらかつた。

「ああ、もうそんな時分かい。じやおひるとしようか。坊やを呼んで来るといい」  
彼は虚勢きよせいを張って、快活らしく答えるのであった。此頃このころでは、何につけても虚勢が彼の習慣になつていた。

そういう日に限つて、女中達の心づくしか、食膳しょくぜんにはいつもより御馳走ごちそうが並ぶのであった。でも格太郎はこの一月ばかりというもの、おいしい御飯をたべたことがなかった。子供の正しょういち一も家の冷い空氣に当たると、外の餓鬼がきだい大将だいしょうが俄にわかにしおしおして了うのだつた。

「ママどこへ行つたの」

彼はある答えを予期しながら、でも聞いて見ないでは安心しないのである。

「おじいちやまの所へいらつしやいましたの」

女中が答えると、彼は七歳の子供に似合わぬ冷笑の様なものを浮べて、「フン」と云つたきり、御飯をかき込むのであった。子供ながら、それ以上質問を続けることは、父親に遠慮するらしく見えた。それと彼には又彼丈けの虚勢があるのだ。

「パパ、お友達を呼んで来てもいい」

御飯がすんで了うと、正一は甘える様に父親の顔を覗のぞき込んだ。格太郎は、それがいた

いけな子供の精一杯の追従ついでの様な気がして、涙ぐましいじらしきと、同時に自分自身に對する不快とを感じないではいられなかつた。でも、彼の口をついて出た返事は、いつもの虚勢以外のものではないのだつた。

「アア、呼んで来てもいいがね。おとなしく遊ぶんだよ」

父親の許しを受けると、これも又子供の虚勢かも知れないのだが、正一は「嬉しい嬉しい」と叫びながら、さも快活に表の方へ飛び出して行って、間もなく三四人の遊び仲間を引っぱつて来た。そして、格太郎がお膳の前で楊枝ようじを使っている処ところへ、子供部屋の方から、もうドタンバタンという物音が聞え始めた。

## 二

子供達は、いつまでも子供部屋の中にじつとしていながつた。鬼ごっこか何かを始めたと見えて部屋から部屋へ走り廻まわる物音や、女中がそれを制する声などが、格太郎の部屋まで聞えて来た。中には戸惑いをして、彼のうしろの襖ふすまを開ける子供さえあつた。

「アツ、おじさんがいらあ」

彼等は格太郎の顔を見ると、きまり悪相わるそうにそんなことを叫んで、向うへ逃げて行つた。しまいには正一までが彼の部屋へ闖入ちんにゆうした。そして、「ここへ隠れるんだ」などと云いながら、父親の机の下へ身をひそめたりした。

それらの光景を見ていると、格太郎はたのもしい感じで、心が一杯になつた。そして、ふと、今日は植木いじりをよして、子供らの仲間入りをして遊んで見ようかという氣になつた。

「坊や、そんなにあばれるのはよしにして、パパが面白いお噺はなしをして上げるから、皆みんなを呼んどいで」

「やあ、嬉しい」

それを聞くと、正一はいきなり机の下から飛び出して、駈けて行つた。

「パパは、とてもお噺が上手なんだよ」

やがて正一は、そんなこまっちやくれた紹介をしながら、同勢どうせいを引ひきつれた恰好かつこうで、格太郎の部屋へ入つて来た。

「サア、お噺しとくれ。恐こわいお噺がいいんだよ」

子供達は、目白押しにそこへ坐つて、好奇の目を輝かしながら、あるものは恥しそくに、



おずおずして、格太郎の顔を眺めるのであった。彼等は格太郎の病気のことなど知らなかつたし、知っていても子供のことだから、大人の訪問客の様に、いやに用心深い態度など見せなかつた。格太郎にはそれも嬉しいのである。

彼はそこで、此頃になく元気づいて、子供達の喜び相なお嘸を思い出しながら、「昔ある国によくの深い王様があつたのだよ」と始めるのであった。一つのお嘸を終つても、子供達は「もつともつ」といつて諾かなかつた。彼は望まれるままに、二つ三つとお嘸の数を重ねて行つた。そうして子供達と一緒にお伽嘸の世界をさまよっている内に、彼は益々上機嫌になつて来るのだつた。

「じゃ、お嘸はよして、今度は隠れん坊をして遊ぼうか。おじさんも入るのだよ」  
 しまいに、彼はそんなことを云い出した。

「ウン、隠れん坊がいいや」

子供達は我意を得たと云わぬばかりに、立ち処に賛成した。

「じゃね、この家中で隠れるのだよ。いいかい。さあ、ジャンケン」

ジャンケンポンと、彼は子供の様にはしやぎ始めるのだつた。それは病気のさせる業であつたかも知れない。それとも又、細君の不行跡に対する、それとなき虚勢であつたか

も知れない。いずれにしろ、彼の挙動に、一種の自棄気味の混っていることは事実だった。最初二三度は、彼は態と鬼になって、子供達の無邪気な隠れ場所を探し廻った。それにあきると隠れる側になって、子供達と一緒に押入れの中だとか、机の下だとかへ、大きな身体を隠そうと骨を折った。

「もういいか」「まあただよ」という掛声が、家中に狂気めいて響き渡った。

格太郎はたった一人で、彼の部屋の暗い押入れの中に隠れていた。鬼になった子供が、「何々ちゃんめつけた」と呼びながら部屋から部屋を廻っているのが幽に聞えた。中には「ワーツ」と怒鳴って隠れ場所から飛び出す子供などもあった。やがて、銘々発見されて、あとは彼一人になったらしく、子供達は一緒になって、部屋部屋を探し歩いている気勢がした。

「おじさんどこへ隠れたんだらう」

「おじさあん、もう出ておいでよ」

などと口々に喋るのが聞えて、彼等は段々押入れの前へ近づいて来た。

「ウフフ、パパはきつと押入れの中にいるよ」

正一の声で、すぐ戸の前で囁くのが聞えた。格太郎は見つかり相になると、もう少しじ

らしてやれという気で、押入れの中にあつた古い長持ながもちの蓋ふたをそつと開いて、その中へ忍び、元の通り蓋をして、息をこらした。中にはフワフワした夜具かなんかが入っていて、丁度寝台にでも寝た様で、居心地が悪くなかつた。

彼が長持の蓋を閉めるのと引違いに、ガラツと重い板戸が開く音がして、

「おじさん、めつけた」

という叫び声が聞えた。

「アラツ、いないよ」

「だって、さつき音がしていたよ、ねえ何々ちゃん」

「あれは、きつと鼠ねずみだよ」

子供達はひそひそ声で無邪気な問答をくり返していたが、（それが密閉された長持の中では、非常に遠くからの様に聞えた）いつまでたつても、薄暗い押入れの中は、ヒツソリして人の氣勢もないので、

「おばけだあ」

と誰かが叫ぶと、ワーツと云つて逃げ出して了つた。そして、遠くの部屋で、

「おじさあん、出ておいでよう」

と口々に呼ぶ声が幽に聞えた。まだその辺の押入れなどを開けて、探している様子だった。

## 三

まつ暗な、樟しょうのう 脳のう 臭い長持の中は、妙に居心地がよかった。格太郎は少年時代の懐なつかしい思い出に、ふと涙ぐましくなっていた。この古い長持は、死んだ母親の嫁入り道具の一つだった。彼はそれを舟ふねになぞらえて、よく中へ入って遊んだことを覚えていた。そうしている、やさしかった母親の顔が、闇の中へ幻の様に浮んで来る気さえした。

だが、気がついて見ると、子供達の方は、探しあぐんでか、ヒソソリして了った様子だった。暫く耳をすましていると、

「つままないなあ、表へ行つて遊ばない」

どこの子供だか、興ざめ顔に、そんなことを云うのが、ごく幽に聞えて来た。

「パパちやあん」

正一の声であった。それを最後に彼も表へ出て行く氣勢だった。

格太郎は、それを聞くと、やっと長持を出る気になった。飛び出して行って、じれ切った子供達を、ウンと驚かせてやろうと思つた。そこで勢込んで長持の蓋を持上げようとすると、どうした事か、蓋は密閉されたままビクとも動かないのだった。でも、最初は別段何でもない事のもりで、何度もそれを押し試みていたが、その内に恐しい事実が分つて来た。彼は偶然長持の中へとじ込められて了つたのだった。

長持の蓋には穴の開いた蝶交の金具がついていて、それが下の突出した金具にはまる仕掛けなのだが、さつき蓋をしめた時、上に上げてあつたその金具が、偶然おちて、錠前を卸したのと同じ形になつてしまつたのだ。昔物の長持は堅い板の隅々に鉄板をうちつけた、いやという程巖乗な代物だし、金具も同様に堅牢に出来ているのだから、病身の格太郎には、逆も打破ることなど出来相もなかつた。

彼は大声を上げて正一の名を呼びながら、ガタガタと蓋の裏を叩いて見た。だが、子供達は、あきらめて表へ遊びに出て了つたのか、何の答えもない。そこで、彼は今度は女中達の名前を連呼して、出来る丈けの力をふりしぼつて、長持の中であばれて見た。ところが、運の悪い時には仕方のないもので、女中共は又井戸端で油を売っているのか、それとも女中部屋にいても聞えぬのか、これも返事がないのだ。

その押入れのある彼の部屋というのが、最も奥まった位置な上に、ギッシリ密閉された箱の中で叫ぶのでは、二間三間向うまで、声を通るかどうかも疑問だった。それに、女中部屋となると、一番遠い台所の側にあるのだから、殊更ら耳でもすましていない限り、先ず聞え相もないのだ。

格太郎は、段々上ずった声を出しながら、このまま誰も来ないで、長持の中で死んで了うのではないかと考えた。馬鹿馬鹿しいそんなことがあるものかと、一方では寧ふき出し度い程滑稽な感じもするのだけれど、それがあながち滑稽でない様にも思われる。気がつくくと、空気に敏感な病気の彼には、何んだかそれが乏しくなった様で、もがいた為ばかりでなく、一種の息苦しさが感じられる。昔出来の丹念な拵えなので、密閉された長持には、恐らく息の通う隙間もないのに相違なかった。

彼はそれを思うと、さい前から過激な運動に、尽きて了ったかと思える力を更らにふりしぼって、叩いたり蹴ったり、死にもの狂いにあばれて見た。彼が若し健全な身体の持主だったら、それ程もがけば、長持のどこかへ、一ヶ所位の隙間を作るのは、訳のないことであつたかも知れぬけれど、弱り切った心臓と、痩せ細った手足では、到底その様な力をふるうことは出来ない上に、空気の欠乏による、息苦しきは、刻々と迫って来る。疲労と、

恐怖の為に、喉は呼吸をするのも痛い程、カサカサに乾いて来る。彼のその時の気持を、何と形容すればよいのであろうか。

若しこれが、もう少しどうかした場所へとじ込められたのなら、病の為に遅かれ早かれ死なねばならぬ身の格太郎は、きつとあきらめて了ったに相違ない。だが、自家の押入れの長持の中で、窒息するなどは、どう考えて見ても、あり相もない、滑稽至極なことなので、もろくも、その様な喜劇じみた死に方をするのはいやだった。こうしている内にも、女中がこちらへやって来ないものでもない。そうすれば彼は夢の様に助かることが出来るのだ。この苦しみを一場の笑い話として済まして了うことが出来るのだ。助かる可能性が多い丈けに、彼はあきらめ兼ねた。そして、怖さ苦しきも、それに伴って大きかった。

彼はもがきながら、かすれた声で罪もない女中共を呪った。息子の正一をさえ呪った。距離にすれば恐らく二十間とは隔つていない彼等の悪意なき無関心が、悪意なきが故に猶更うらめしく思われた。

闇の中で、息苦しきは刻一刻と募つて行つた。最早や声も出なかった。引く息ばかりが妙な音を立てて、陸に上つた魚の様に続いた。口が大きく大きく開いて行つた。そして骸

骨いこつの様な上下の白歯しらばが齒ぐきの根まで現れて来た。そんなことをした所で、何の甲斐もないと知りつつ、両手の爪は、夢中に蓋の裏を、ガリガリと引搔ひつかいた。爪のはがれることなど、彼はもう意識さえしていなかった。断末魔の苦しみであった。併し、その際きわになつても、まだ救いの来ることを一縷いちろの望みに、死をあきらめ兼ねていた彼の身の上は、云おう様ようもない残酷なものであった。それは、どの様な業ごうびよう病びょうに死んだ者も、或あるいは死刑囚さえもが、味あじわつたことのない大苦痛と云わねばならなかった。

#### 四

不倫の妻おせいせいが、恋人との逢瀬わうせから帰つて来たのは、その日の午後三時頃、丁度格太郎が長持の中で、執念深くも最後の望みを捨て兼ねて、最早や虫の息で、断末魔だんまつまの苦しみをもがいている時だった。

家を出る時は、殆ど夢中で、夫の心持こころもちなど顧かえりみる暇ひまもないのだけれど、彼女とても帰つた時には流石さすがにやましい気がしないではなかった。いつになく開け放された玄関などの様子を見ると、日頃ビクビクもので気づかっていた破綻はたんが、今日こそ来たのではないかと、も



う心臓おどが躍り出すのだった。

「只今ただいま」

女中の答えを予期しながら、呼んで見たけれど、誰も出迎えなかった。開け放された部屋部屋には人の影もなかった。第一、あの出不精でぶしような夫の姿の見えないのがいぶかしかった。

「誰もいないのかい」

茶の間へ来ると、甲高かんだかい声でもう一度呼んで見た。すると、女中部屋の方から、

「ハイ、ハイ」

と頓とんきよう狂な返事がして、うたた寝でもしていたのか、一人の女中が脹はれぼったい顔を  
して出て来た。

「お前一人なの」

おせいは癬くせの癩かんが起つてくるのを、じつと堪こらえながら聞いた。

「あの、お竹たけどんは裏で洗濯せんたくをしているのでございます」

「で、檀だんな那様は」

「お部屋でございましょう」

「だつていらつしやらないじゃないか」

「あら、そうでございますか」

「なんだね。お前きつと昼寝をしてたんでしよう。困るじゃないか。そして坊やは」

「さあ、さい前まで、お家で遊んでいらしたのですが、あの、檀那樣も御一緒に隠れん坊をなすつていたのでございますよ」

「まあ、檀那樣が、しようがないわね」それを聞くと彼女はやつと日頃の彼女を取返しながら「じゃ、きつと檀那樣も表なんだよ。お前探しといで、いらつしやればそれでいいんだから、お呼びしないでいいからね」

とげとげしく命令を下して置いて、彼女は自分の居間へ入ると、一寸鏡ちよつとの前に立つて見てから、さて、着換えを始めるのであった。

そして、今帯を解きにかかろうとした時であった。ふと耳をすますと、隣の夫の部屋から、ガリガリという妙な物音が聞えて来た。虫が知らせるのか、それがどうも鼠などの音ではない様に思われた。それに、よく聞くと、何だかかすれた人の声さえする様な気がした。

彼女は帯を解くのをやめて、気味の悪いのを辛抱しんぼうしながら、間の襖あいだを開けて見た。す

ると、さつきは気づかなかつた、押入れの板戸の開いていることが分つた。物音はどうやらその中から聞えて来るらしく思われるのだ。

「助けて呉れ、俺だ」

幽な幽な、あるかなきかのふくみ声ではあつたが、それが異様にハッキリとおせいの耳を打つた。まぎれもない夫の声なのだ。

「まあ、あなた、そんな長持の中なんか、一体どうなすつたんですの」

彼女も流石に驚いて長持の側へ走り寄つた。そして、掛け金はずししながら、

「ああ、隠れん坊をなすつていたのですね。ほんとうに、つまらないいたずらをなさるものだから……でも、どうしてこれがかかつて了つたのでしょうか」

若しおせいが生れつきの悪女であるとしたなら、その本質は、人妻の身で隠し男を拵えることなどよりも、恐らくこうした、悪事を思い立つことのす早やさという様な所にあつたのではあるまいか、彼女は掛け金はずして、一寸蓋を持ち上げようとした丈で、何を思つたのか、又元々通りグツと押えつけて、再び掛け金をかけて了つた。その時、中から格太郎が、多分それが精一杯であつたのだろう、併しおせいの感じでは、ごく弱々しい力で、持ち上げる手ごたえがあつた。それを押しつぶす様に、彼女は蓋を閉じて了つたの

だ。後に至つて、無慙な夫殺しのことを思い出す度毎に、最もおせいを悩ましたのは、外の何事よりも、この長持を閉じた時の、夫の弱々しい手ごたえの記憶だった。彼女にとつては、それが血みどろでもがき廻る断末魔の光景などよりは、幾層倍も恐しいものに思われたことである。

それは兎も角、長持を元々通りにすると、ピツシヤリと板戸を閉めて、彼女は大意で自分の部屋に帰った。そして、流石に着換えをする程の大胆さはなく、真青になつて、箆笥の前に坐ると、隣の部屋からの物音を消す為でもある様に、用もない箆笥の抽出を開けたり閉めたりするのだつた。

「こんなことをして、果して自分の身が安全かしら」

それが物狂わしいまで気に懸つた。でも、その際ゆつくり考えて見る余裕などあろう筈もなく、ある場合には、物を思うことすら、どんなに不可能だかということを感じながら、立つたり坐つたりするばかりであつた。とは云うものの、後になつて考えた所によつても、彼女のその咄嗟の場合の考えには、少しの粗漏もあつた訳ではなかつた。掛け金は独手にしめることは分つてゐるのだし、格太郎が子供達と隠れん坊をしていて、誤つて長持の中へとじ込められたであろうことも、子供達や女中共が十分証言して呉れるに相違

はなく、長持の中の物音やさけびこえ叫声が聞えなかったという点も、広い建物のことで気づかなかつたといえよそれまでなのだ。現に女中共でさえ何も知らずにいた程ではないか。

そんな風に深く考えた訳ではなかつたけれど、おせいの悪に鋭い直覚が、理由を考えるまでもなく、「大丈夫だ大丈夫だ」と囁いて呉れるのだった。

子供を探しにやった女中はまだ戻らなかつた。裏で洗濯をしている女中も、家の中へ入つて来た氣勢はない。早く、今の内に、夫のうなり声や物音が止まってくればいい、そればかりが彼女の頭一杯の願ひだった。だが、押入れの中の、執念深い物音は、殆ど聞取れぬ程に衰えてはいたけれど、まるで意地の悪いゼンマイ仕掛けの様に、絶え相になつては続いた。気のせいではないかと思つて、押入れの板戸に耳をつけて（それを開くことはどうしても出来なかつた）聞いて見ても、やっぱり物凄すりおとい摩擦音は止んではいなかつた。

そればかりか、恐らく乾き切つてコチコチになつていであろう舌で、殆ど意味をなさぬよまいごと世迷言をつぶやく氣勢さえ感じられた。それがおせいに対する恐しい呪いの言葉であることは、疑うまでもなかつた。彼女は余りの恐しさに、危く決心をひるがえ翻して長持を開こうかとまで思つたが、併し、そんなことをすれば、一層彼女の立場が取返しのつかぬものになることは分り切つていた。一たん殺意を悟られて了つた今更、どうして彼を助けることが

出来よう。

それにしても、長持の中の格太郎の心持はどの様であつたらう。加害者の彼女すら、決心を翻そうかと迷つた程である。併し彼女の想像などは、当人の世にも稀まれなる大苦悶くもんに比して、千分一、万分一にも足らぬものであつたに相違ない。一たんあきらめかけた所へ、思いがけぬ、仮令たとひ姦婦かんぶであるとはいへ、自分の女房が現れて、掛け金はずしさえしたのである。その時の格太郎の大歓喜は、何に比べるものもなかつたであらう。日頃恨うらんでいたおせいも、この上二重三重の不倫を犯したとしても、まだおつりが来る程有難く、かたじけなく思われたに相違ない。いかに病弱の身とはいへ、死の間際まぎわを味つた者にとつて、命はそれ程惜しいのだ。だが、その束つかの間まの歓喜から、彼は更に、絶望などという言葉では云い尽せぬ程の、無限地獄むげんへつきおとされて了つたのである。若し救いの手が来ないで、あのまま死んで了つたとしても、その苦痛は決してこの世のものではなかつたのに、更に更に、幾層倍、幾十層倍の、云うばかりなき大苦悶は、姦婦の手によつて彼の上に加えられたのである。

おせいも、それ程の苦悶を想像しよう筈はなかつたけれど、彼女の考え得た範圍丈でも、夫の悶死を憐み、彼女の残虐を悔いしない訳には行かなかつた。でも、悪女の運命的な不倫

の心持は、悪女自身にもどうしようもなかった。彼女は、いつのまにか静まり返つて了つた押入れの前に立つて、犠牲者の死を弔う代りに、懐しい恋人のおもかげを描いているのだつた。一生遊んで暮せる以上の夫の遺産、恋人との誰はばからぬ楽しい生活、それを想像する丈で、死者に対するさばかりの憐みの情を忘れるのには十分なのだ。

彼女は、かくて取返した、常人には想像することも出来ぬ平静を以て、次の間に退くと、唇の隅に、冷い苦笑をさえ浮べて、さて、帯を解きはじめるのであつた。

## 五

その夜八時頃になると、おせいによつて巧みにも仕組まれた、死体発覚の場面が演じられ、北村家は上を下への大騒ぎとなつた。親戚、出入の者、医師、警察官、急を聞いてはせつけたそれらの人々で、広い座敷が一杯になつた。検死の形式を略する訳には行かず、態と長持の中にそのままにしてあつた、格太郎の死体のまわりには、やがて係官達が立並んだ。真底から歎き悲しんでいる弟の格二郎、偽りの涙に顔を汚したおせい、係官に混つてその席に列つたこの二人が、局外者からは、少しの甲乙もなく、どの様に愁傷らし

く見えたことであろう。

長持は座敷の真中に持ち出され、一警官の手によって、無造作に蓋が開かれた。五十燭し光よつこうの電燈が、醜く歪んだ、格太郎の苦悶の姿を照し出した。日頃綺麗きれいになでつけた頭髪が、逆立つばかりに乱れた様さま、断末魔そのものの如き手足のひつつり、飛び出した眼球、これ以上に開き様のない程開いた口、若しおせいあの身内に、悪魔そのものがひそんででもない限り、一目この姿を見たならば、立所たちどころに悔悟かいご自白すべき筈である。それにも拘らず、彼女は流石にそれを正視することは出来ない様子であったが、何の自白をもしなかつたばかりか、白々しい嘘うそ八百を、涙にぬれて申立てるのだ。彼女自身でさえ、どうしてこうも落ちつくことが出来たのか、仮令人一人殺した上の糞度胸くそどきょうとはいえ、不思議に思う程であった。数時間前ぜん、不義の外出から帰って、玄関にさしかかった時、あの様に胸騒がせた彼女とは（その時も已すでに十分悪女であったに相違ないのだが）我ながら別人の観があった。これを見ると、彼女の身内には、生れながらに、世に恐るべき悪魔が巢喰すくついで、今その正体を現し始めたものであるうか。これは、後程のちほど彼女が出逢つたある危機に於ける、想像を絶した冷静さに徴ちようしても、外に判断の下し方はない様に見えるのだ。

やがて検死の手続きは、別段の故障なく終り、死体は親族の者の手によって、長持の中



から他の場所へ移された。そしてその時、少しばかり余裕を取返した彼等は、始めて長持の蓋の裏の掻き傷に注意を向けることが出来たのである。

若し、何の事情も知らず、格太郎の惨死体を目撃せぬ人が見たとしても、その掻き傷は異様に物<sup>もの</sup>凄<sup>すこ</sup>いものに相違なかつた。そこには死人の恐るべき妄<sup>もう</sup>執<sup>しゆう</sup>が、如何なる名画も及ばぬ鮮かさを以て、刻まれているのだ。何<sup>なん</sup>人<sup>びと</sup>も一目見て顔をそむけ、二度とそこへ目をやろうとはしない程であつた。

その中で、掻き傷の画面から、ある驚くべきものを発見したのは、当のおせいと格二郎の二人丈であつた。彼等は死骸と一緒に別間<sup>べつま</sup>に去つた人々のあとに残つて、長持の<sup>りようた</sup>両<sup>り</sup>端<sup>たん</sup>から、蓋の裏に現れた影の様なものに異様な凝視をつづけていた。おお、そこには一体何があつたのであるか。

それは影の様におぼろげに、狂者の筆の様にたどたどしいものではあつたけれど、よく見れば、無数の掻き傷の上を覆つて、一字は大きく、一字は小さく、あるものは斜めに、あるものはやつと判読出来る程の歪み方でまざまざと、「オセイ」の三文字<sup>もんじ</sup>が現れているのであつた。

「姉<sup>ねえ</sup>さんのことですね」

格二郎は凝視の目を、そのままおせいに向けて、低い声で云った。

「そうですわね」

ああ、このように冷静な言葉が、その際のおせいの口をついて出たことは、何と驚くべき事実であつたか。無論、彼女がその文字の意味を知らぬ筈はないのだ。瀕死ひんしの格太郎が、命の限りを尽して、やっと書くことの出来た、おせいに対する呪いの言葉、最後の「イ」に至つて、その一線を劃かくすると同時に悶死をとげた彼の妄執、彼はそれに続けて、おせいこそ下手人である旨むねを、如何程か書き度かつたであらうに、不幸そのものの如き格太郎は、それさえ得せずして、千秋せんしゅうの遺恨いこんを抱いだいて、ほし固つて了つたのである。

併し、格二郎にしては、彼自身善人である丈に、そこまで疑念を抱くことは出来なかつた。単なる「オセイ」の三字が何を意味するか、それが下手人を指し示すものであるうとは、想像の外ほかであつた。彼がそこから得た感じは、おせいに対する漠然たる疑惑と、兄が未憐みれんにも、死際しにぎわまで彼女のことを忘わすれられず、苦悶の指先にその名を書き止めた無慙の氣持ばかりであつた。

「まあ、それ程私のことを心配して下すつたのでしょうか」

暫くしてから、言外に相手が已に感づいているであろう不倫を悔いた意味をもこめて、

おせいはいしみじみと歎いた。そして、いきなりハンカチを顔にあてて、（どんな名優だつて、これ程空涙そらなみだをこぼし得るものはないであろう）さめぎめと泣くのであった。

## 六

格太郎の葬式を済ませると、第一におせいの演じたお芝居は、無論上べだけではあるが、不義の恋人と、切れることであつた。そして、類なき技巧たぐいを以て、格二郎の疑念をはらすことに専念した。しかも、それはある程度まで成功した。假令一時だつたとはいえ、格二郎はまんまと妖婦の欺瞞ぎまんに陥おちいつたのである。

かくておせいは、予期以上の分配金に預り、息子の正一と共に、住みなれた邸やしきを売つて、次から次と住所を変え、得意のお芝居の助けをかりて、いつとも知れず、親族達の監視から遠ざかつて行くのだつた。

問題の長持は、おせいが強しいて貰い受けて、彼女から密ひそかに古道具屋に売払われた。その長持は今何なんびと人の手に納められたことであろう。あの掻き取きずと不気味な仮名文字かななとが、新しい持主の好奇心を刺戟しげきする様なことはなかつたであろうか。彼は掻き傷にこもる恐しい

妄執にふと心戦おのくことはなかつたか。そして又、「オセイ」という不可思議なる三字に、彼は果して如何なる女性を想像したのであろう。ともすれば、それは世の醜そさを知り初めぬ、無垢むくの乙女おとめの姿であつたかも知れないのだが。

# 青空文庫情報

底本：「江戸川乱歩全集 第3巻 陰獣」光文社文庫、光文社

2005（平成17）年11月20日初版「刷発行

底本の親本：「創作探偵小説集第四巻 湖畔亭事件」春陽堂

1926（大正15）年9月

初出：「大衆文藝」

1926（大正15）年7月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5186）を、大振りにつくっています。

※底本巻末の平山雄一氏による註釈は省略しました。

入力：金城学院大学 電子書籍制作

校正：門田裕志

2017年8月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# お勢登場

## 江戸川乱歩

2020年 7月18日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>